新見公立短期大学紀要　第28巻
pp. 1－6, 2007

原　著

高齢者理解を広げる映画教材の教育効果

古城　幸子*・木下　香織

看護学教育

（2007年11月7日受理）

老年看護学Ⅰ（1年次後期）の教材としてSF作品の米映画を使用した。その教育効果を学生の鑑賞レポートから分析した。学生は登場人物の選択や決定に，自分や家族の生き方を重ねて追体験しており，その意思決定の意味を感じ取ることができていた．学生のレポートの中で記述された意思決定の要因は，「個別性」，「心の若さ」の発見，「夫婦愛」，「家族愛」「死の悲しみと克服」，さらに「社会的な役割」「友情」「性」などがあげられ，高齢者理解を広げる学びが抽出された。

（キーワード）老年看護学，教育方法，映画教材，高齢者理解

はじめに

看護学生の高齢者理解をより具体的に深め広げることをねらいとして，「老年看護学Ⅰ」の授業展開の中で，米映画[1)2)]を教材として活用している。映画教材の使用については，Critical Thinkingへの教育効果についての報告[3)4)]はあるものの，高齢者理解の視点で分析した研究はみられなかった。今回学生の提出した感想レポートの内容で，高齢者の「意思決定の要因」の記述をキーワードに，高齢者理解の広がりに焦点を当てて教育効果を分析した。

Ⅰ　研究目的

老年看護学の教材として用いた映画の高齢者理解に関する教育効果を明らかにする。

Ⅱ　教材活用方法

老年看護学ⅠまたはⅡの授業の中で，10年以上前から映画教材をいくつか[5)6)]活用してきた。その中で今回の米映画が高齢者理解の幅を広げる授業のねらいに最も近い内容であると考え，5年前より老年看護学Ⅰのシラバス上に明確に位置づけた。

「老年看護学Ⅰ」は1年次後期に2単位30時間，表1のように15コマを＜理念＞＜対象論＞＜家族論＞＜健康論＞＜まとめ＞として講義を行い，演習として2つの課題を提示している。一つは，冬休みを利用して＜祖父母のライフヒストリーの語りを聴く＞ことである。この演習課題は，＜対象論＞＜家族論＞で学んだ知識を“学生自身の家族としての祖父母”という身近な問題として捉えなおすことがねらいである。学生個々が，祖父母の語りを聴いてレポートし，出身地域別に組んだグループで情報交換と学びあいを1コマ90分行なう。

表1　老年看護学Ⅰの授業計画

コマ	講義項目	講義内容
1	老年看護学の理念	
2	対象論1	身体的老化の過程
3	対象論2	〃
4	対象論3	精神的老化の過程
5	対象論4	社会的老化の過程
6	対象論5	ライフサイクルと老年期
7	対象論6	対象論まとめ
8	家族論1	現代の高齢者と家族
9	家族論2	家族の介護機能と課題
10	演習1	祖父母のライフヒストリー
11	演習2－1	映画CoCoon鑑賞
12	演習2－2	〃
13	健康論1	高齢者の健康と保健
14	健康論2	老年期の健康障害
15	まとめ	介護保険制度と高齢者の生活

もう一つの演習課題が映画鑑賞である。昼休みを挟んだ2コマで連続して1話と2話を鑑賞する。使用するSF作品の米映画（注1）は，4組の老夫婦に直面する重大な選択

*連絡先：古城幸子　看護学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

に対して，意思決定に影響を与える様々な要因を考える事ができるストーリーである。この映画鑑賞の演習では，老夫婦の意思決定に与える要因を考えることで，高齢者理解の幅を広げることがねらいである。鑑賞前に，4組の老夫婦の名前と意志決定要因をメモ書きするA4版1枚のシートを配布し，視点として「生」「死」「老い」「命」「愛」「夫婦」「性」「家族」「友情」などとキーワードをあげ，多様な視点で鑑賞するように説明をしている。

Ⅲ　研究方法

1．調査対象および期間

A短期大学3年課程の1年次生を対象に2007年1月に映画教材を使用し，その後課題として提出されたレポート64編を分析対象とした。

2．分析方法

レポートの中から，高齢者理解に関する学びを研究者2名で抽出し，その内容をカテゴリー化した。

3．倫理的配慮

レポートは成績評価のひとつの課題であるため，成績評価終了後に分析を開始すること，そのため，分析結果が成績評価には反映されないこと，研究の目的，データは統計的に処理し匿名性が保持されること等を説明し同意を得た。また，対象学生に本研究結果を説明し，公開発表することの了解を得た。

Ⅳ　結果と考察

1．学生の学びの広がり

1）4組の老夫婦の選択から

米SF映画のストーリーは，リタイアメントビレッジで生活する4組の老夫婦を主人公に，宇宙からの訪問者とのかかわり（この関わりがSF）の中で，宇宙に行く『永遠の命』か『限りある命』を受け止め地球に残るかの選択と決定をしていく物語である。

表2　4組の老夫婦の選択

	1話	2話
A男女	永遠の命	永遠の命
B夫婦	永遠の命	限りある命
C夫婦	永遠の命	限りある命
D夫婦	限りある命	限りある命

それぞれの老夫婦における1話と2話の選択と決定は，表2で示している様に，宇宙へと旅立つ『永遠の命』と地球に残る『限りある命』の2つの選択である。その選択に影響を与えた要因を，学生はそれぞれの夫婦単位で記述していた。それらをカテゴリー（文中の下線部）でまとめると，表3のような学び（表中の下線部は個別の夫婦に特徴的なもの）が得られた。

①A夫婦の場合

＜ストーリー＞　1話でのA夫婦は，独身の高齢男女でお互いに関心を持っている。身体機能の低下で告白する勇気のなかった男は，性機能の回復をきっかけに愛を確かめ合う。1話の決定は『永遠の命』への選択であった。2話で，妊娠が分かり，子供への未来とその生活環境に葛藤しながら，1話と同様の『永遠の命』を選択する。

＜学び＞　学生の学びは，身体的機能の衰退の中でも性機能の喪失について考えることができていた。性機能の喪失が男女の接近を妨げたり，一方で性機能の回復が愛情の積極的な表現になることを理解していた。また，高齢者の恋愛や性についても，違和感なく受け止めており，2話での結婚・妊娠・出産も喜びとして受け止めている学生がほとんどであった。身体機能の衰退と同様に精神機能も老いるのではないかという，思い込みをしていたことへの反省の記述も見られた。精神的な心の若さは，高齢になっても変わらず，美しくありたい気持ちという女性，逞しくありたいという男性の気持ちが内面にあることを再認識していた。1話の選択は『永遠の命』であり，それはこの夫婦の愛情を継続させるために必要な選択だったと学生は理解していた。

2話での妊娠をきっかけに，A夫婦の葛藤が生まれる。自分たちと同じように，この地球での思い出を作ってやりたいという子供への思いと，高齢である自分たち自身の残された命への不安である。成長を見守りたいとの親の気持ちから，『永遠の命』を選択したことには，多くの学生たちが共感していた。

②B夫婦の場合

＜ストーリー＞　娘と孫との交流のある老夫婦。車の運転ができなくなるなどの行動範囲が狭まり，お互いの健康への不安や，相手を失うことへの現実的な恐怖から，1話では『永遠の命』を選択。2話では成長している孫との再会で，その成長する時間を共に過ごすことや，人生の知恵を孫に伝えたいという思いから『限りある命』を選択する。

＜学び＞　学生の学びは，身体的機能の衰退を老夫婦が認識しながら，お互いをいたわりあっている姿である。身体機能の低下の中でも，具体的な場面として車の免許更新のシーンがある。視力低下による自動車免許更新が不可となった老夫婦は，行動範囲の縮小を余儀なくされた。生活行動が狭められる要因が，身体的機能低下であることを実感した学びとなっている。1話では，伴侶を失うことへの不安から，『永遠の命』を選択することは，配偶者の死が最も大きいストレスであることを理解してい

表3　4組の老夫婦の選択と決定から学んだ学生の高齢者理解

	1話の選択からの学び	2話の選択からの学び
全体	・ **個別性** ・ **身体機能の衰退と心の若さ** ・ **死への不安**	・ **夫婦愛・家族愛** ・ **生きがい**
A男女	・ 身体的機能の衰退 ・ 性機能の喪失 ・ 高齢男女の恋愛 ・ 高齢者の性 ・ 精神的な心の若さ ・ 美しくありたい気持ち	・ 結婚・妊娠 ・ 自分たちと同じ思い出を作ってやりたいという子供への思い ・ 成長を見守りたいと言う親の気持ち
B夫婦	・ 老夫婦のいたわり ・ 伴侶を失うことへの不安 ・ 身体的機能の衰退 ・ 行動範囲の縮小 ・ 視力低下で自動車免許取得が不可	・ 娘や孫への愛 ・ 孫の成長を見たい ・ 「親は子供より長生きをしてはいけない」 ・ 限りある命の受容と次世代への伝言
C夫婦	・ 病い（夫の悪性疾患） ・ 死への不安 ・ 夫婦の過去の出来事での葛藤 ・ 夫婦の不和	・ 夫の病の再発による死への恐怖 ・ 妻の人に役立つことへの生きがいの発見 ・ 社会的役割の重要性 ・ 夫の自己犠牲と妻への愛情表現
D夫婦	・ 認知症の妻と介護する夫の夫婦愛 ・ 自然な生と死に対する夫の価値観 ・ 妻の死と喪失の悲しみ	・ 妻の死から立ち直れない夫 ・ 生きがいの再発見 ・ 人との関係の重要性 ・ 悲しみの克服

る学生にとって，共感できる選択であった。

2話では，大きくなった孫との再会から，孫の成長を見たいという思い，娘や孫への愛を再確認したことを家族愛として学んでいた。また，孫へ知恵や経験を伝えたい，支えたいという思いは，次世代への伝言として高齢者の重要な存在意味を理解することになった。学生が最も感銘を受けたと記述している台詞は「親は子供より長生きをしてはいけない」であった。娘や孫の成長を見守りながら，限りある命の受容へと変化していったことを理解し，家族の存在の重要性を学ぶことができた。この夫婦への学生の共感が多いのは，娘と孫という家族が設定されていることであろう。

③C夫婦の場合

＜ストーリー＞　夫は悪性腫瘍で日に日に体力が落ちていくが，宇宙のパワーで治癒する。元気になった夫は若い頃の浮気性が再燃し，夫婦関係はひび割れる。1話の選択時にお互いの気持ちを確認し，夫の病気が再発しない『永遠の命』を選択する。2話では妻が保育の仕事を頼まれ生きがいを感じていたとき，交通事故にあう。夫は自分の病気再発を感じ，自分の命と引き換えに妻の命を助ける。妻は仕事をすることを選び，『限りある命』を選択する。

＜学び＞

高齢になると罹患率も高く，特に生命を左右する病いへの罹患もまれではない。C夫婦の夫は悪性疾患で，徐々に衰弱していき，死への不安が大きいことを学生が実感していた。しかし，夫の身体機能の低下でバランスが取れていた夫婦の関係は，夫の体力の回復と共に，夫婦の不和という危機に直面する。夫の浮気がきっかけであったが，それまでの夫婦の道のりで過去の出来事での葛藤が再燃してしまう。穏やかな老夫婦にも，過去の道のりには多くの紆余曲折があり，人生のストーリーが理解できていないと，現在の老夫婦の感情や行動は理解できないことを学ぶことができていた。1話ではその葛藤を乗り越えて2人で生きる『永遠の命』の選択は学生の納得が得られる結論だった。

2話では，人生で初めて仕事を得た妻が選択に迷う。それは保育者として役割を与えられたことによる生きがいの発見であった。そのことは学生が高齢者への社会的役割の重要性を再認識することになった。一方，夫は病の再発と死の恐怖の中で，妻の生きがいをサポートすることを決意し，交通事故にあった妻を助けるために自分の命のパワーを全て捧げてしまう。夫の自己犠牲と妻への愛情表現が最も胸に迫る場面であり，多くの学生が感動で涙するシーンである。そして残された妻は人の役に立

つ生きがいを持って『限りある命』を選択し、そのことにも学生は理解を示していた。

④D夫婦の場合

＜ストーリー＞　認知症の妻を保守的で頑固な夫が介護する夫婦。宇宙のパワーを自然なことではないと受け付けず，結局妻は死んでしまう。1話では頑固に“人は『限りある命』が自然だ”と選択する。2話では，妻の死から立ち直れない夫も友人たちや新しい異性の友達を得て，徐々に悲しみを乗り越える。妻の眠るこの地で生きることを『限りある命』として1話同様に選択する。

＜学び＞　学生の学びは，認知症の妻と介護する夫の夫婦愛である。夫のことしかわからなくなっていく妻へ，食事の介助や内服の援助などをより添って行なう夫の優しさが伝わってくる。夫は保守的で実直な男性であり，自然な生と死に対する価値観も頑固に持ち合わせている。しかし，現実に妻の死を目の当たりにしたとき，宇宙のパワーも借りたいと思うほど喪失の悲しみは大きい。しかし，夫の価値観は妻の死によっても変わらず，1話では『限りある命』を選択した。

2話では，月命日には墓参を欠かさず，また現実の生活にも張りをなくし，自殺しようとするほど，妻の死から立ち直れない夫の姿から，配偶者の死の悲しみの深さを学んでいる。しかし，支えあう友人や新しい出会いによる生きがいの再発見によって，徐々に立ち直っていき，人を癒し，前向きにさせていくのは人との関係で，その重要性に気付くことができていた。その関係の中で悲しみの克服へと繋がっていたと学んでいる。

2）映画全体から

表3の学びのカテゴリーは全体で共通したものは5点にまとめられた。学生のレポートの中で多く記述された学びは，「個別性」であった。学生は，映画の全体を通して，4組の老夫婦それぞれに意志決定要因が異なり，同じ生活環境であっても，人生選択は異なり個別的であることを実感していた。その個別性は尊重され，選択の良し悪しの評価はできないというものであった。

また，高齢になっても若い頃の気持ちと変わらないという「心の若さ」を追体験している。身体機能を取り戻した主人公たちが，ダンスに興じたり，バスケットボールやビーチバレーなどのスポーツを楽しんだりする姿は，老化によって諦めていた生活を取戻し，心まで老いているのではないことを実感させてくれる。また，若かった頃と同じように，それぞれの夫や妻に花を贈り，夕暮れの浜辺で愛を語るなど，生活を生き生きと豊かに表現する姿が映像で表現されており，そのことに驚きを記述している学生も多く見られた。それは，老いの身体機能の低下は見かけ上の精神機能低下に映り，学生自身の高齢者理解を狭めていることを感じ取る学びであった。「身体機能の低下と心の若さ」の発見である。

次に抽出された学びは「死への不安」である。配偶者の死が最も大きなストレスであるという知識から，老夫婦がお互いの死を意識しながら，失うことを避ける選択をすることの意味を考えることができていた。また，配偶者の死を体験することになった2組の夫婦をとおして，家族や友人など人との関わりを生きがいとして，死を受け入れることの死の悲しみと克服を実感することができた。

次に「夫婦愛」「家族愛」があげられた。お互いを大切に思う気持ちは同じであっても，その表現方法が異なることを「個別性」として捉えていた。病いを自然なものとして受けとめようとする夫婦や，その病いを治癒させることを優先する選択の夫婦もある。家族から離れても，お互いが永遠に生き続けられる選択や，家族と共に時間を刻む大切さに気付き，自然の限りある命を受けとめる選択の夫婦など，その根底にある「愛」を貫く選択は様々であることを理解できていた。

配偶者の死を克服し，また残された時間を前向きに生きるための「生きがい」は，人との関わりの中で得られていくことを理解できていた。それは，人の役に立つ仕事であったり，友人を支えるという役割であったり，新しい友人との出会いであったりと，社会的な役割や友情は，高齢者も同様に重要な生きがいとなることを学ぶことができた。

2．教材としての教育効果

1）授業展開としての位置づけ

老年看護学Ⅰの15コマのうち，11－12コマ目を使った映画鑑賞である。それ以前に，高齢者理解の視点や身体的・精神的・社会的老化の過程を知識で押さえ，その後家族論として，現代の家族関係や高齢者介護の課題などを8－9コマ目に計画している。演習として，1年次の冬期休暇を活用して，学生自身の祖父母のライフヒストリーの語りを聴くという課題を提示する。10コマ目に出身地の近い学生でグループを作り，インタビューの結果と感想の情報交換をグループワークで行なっている。

それらの学びを経過しての映画鑑賞になるが，高齢者理解の個の視点から，本映画を通して多くの高齢者への視点が広がることが明らかになった。2年次の老年看護学Ⅱでは，健康問題のある高齢者の理解と援助方法の習得や，社会的な制度等の課題についても教授することになり，この映画鑑賞を素材に，病や死，生活の場としてのリタイアメントビレッジという場面設定やケア状況などへと理解の視点を広げることが可能となる。

2）本映画の教育効果

本映画は，アメリカ映画でしかもSFである。学生の中

には，以前TVでの放映を見たものもいたが，視点を説明して鑑賞すると，全く異なった作品のように感じたという感想もあった。SF部分は大変楽しく，映画そのものを楽しむこともできる。しかし，選択決定の要因を注意深く鑑賞すると，学生の学びから得られているように，多くの高齢者理解のキーワードが得られ，高齢者を画一的に見ることはできないことを実感している。

学生の祖父母のライフヒストリーでは，青春時代が日本の最も貧しく暗い時代であったことが影響して，苦労の連続，家族のために自己犠牲を強いてきた歴史が語られることが多い。また，高齢者関連の邦画では，近年認知症を中心に多く制作されているが，やはり重い主題をさらに重く描いている映画が多いのではないだろうか。

この映画は80年代のアメリカで，悠々自適の生活を送る明るい高齢者の姿である。高齢者の感情表現も豊かで，それは文化や歴史の違いはあるものの，日本の高齢者も思いは同様なのではないかと考えさせられる。また，邦画の場合にはタブー視される性的表現も米映画で解放的で違和感なく描かれており，学生の抵抗感も少ないように感じられる。今後戦後世代の高齢者が増加してくると，本映画のような高齢者像が日本でも平均的になってくることも考えられる。ステレオタイプな高齢者像ではなく，柔軟に高齢者イメージを変化，受容できる看護職の人間観の重要性を本映画から汲み取ることが，高齢者理解を広げる映画教材活用のねらいである。

おわりに

高齢者理解を深め広げるための映画教材の活用は，限られた講義時間の中で有効な学びを提供できることがわかった。今後は，今回抽出された学びを「選択」のキーワードに追加して，より深さと広がりのある教材の提示方法の検討が課題である。

注1

Cocoon：RON HAWERD監督　1985年

4組の高齢男女が生活するリタイアメントビレッジの隣に，宇宙からの来た訪問者が滞在した．彼ら宇宙人のパワーによって，病気は治癒し，若者の身体能力を取り戻した．高齢者たちは，永遠の健康と命を約束された星に旅立つ選択の中で，家族や夫婦のあり方を見つめながら決定する。

Cocoon The Return： DANIEL PETRIE監督，1988年

宇宙人の仲間を助けに地球に戻った高齢男女が，残された家族との再会，病の再発による死，限られた生を人のために生きるという体験をし，再度宇宙に帰るかどうかの選択の中で，悩みながら決定していく。

引用文献

1）Cocoon：RON HAWERD監督作品，20世紀フォックス配給，1985.

2）*Cocoon The Return*：DANIEL　PETRIE監督作品，20世紀フォックス配給，1988.

3）正木みどり，沼本教子：老人看護学概論の教授学習過程における Critical Thinking の育成：映画「ドライビング・ミス・デイジー」視聴による学習効果の分析，日本看護学教育学会誌，8(2)，138，1998.

4）正木みどり，沼本教子，中田康夫：老人看護学概論の教授学習過程におけるCritical Thinking の育成 第2報：映画視聴後のワークシートの改善を試みて，日本看護学教育学会誌，9(2)，177，1999.

5）フライド・グリーン・トマト：ジョン・アヴォット監督作品，アスキー映画配給，1991.

6）ドライビングMissデイジー：ブルース・ベレス・フォード監督作品，*東宝東和配給，*1989.

社会学的用語

Educational Effect Movie Material's on Broadening the Understanding of the Elderly

Sachiko KOJO[1], Kaori KINOSHITA[1]

[1]Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

We used an American SF movie as a material for gerontological nursing science (latter semester of freshman). Students' reports on the movie were analyzed from the viewpoint of its educational effect. In the movie, through choice and decision-making of the characters, the students relived the lives of their own and family members, and were able to understand the meaning of the characters' decision-making. The factors mentioned in their reports were 'individuality', 'discovery of youth at heart', 'marital love', 'family love', sorrow of death and getting over it', 'social role', 'friendship' and 'sex'.

Through watching the movie, broadening the understanding of the elderly was recognized.

Key words: gerontological nursing science, teaching method, movie material, understanding of the elder